

[論 文]

Charlotte's Web における
Wilbur の命の救済

橋 本 紀美代

はじめに

1952年に E.B. White(1899–1985) が著わした *Charlotte's Web* は出版当初よりあまたの賛辞を受け、早い時期からアメリカ児童文学の古典の名をほしいままにしてきた。英語圏外への翻訳紹介も数多く、日本においては1973年の鈴木哲子訳に次いで、2001年にさくまゆみこ訳が出版されている。作品は豊かな自然や農場の生活などの詩的描写を背景に、一匹の豚の命の救済を中心にすえた話す動物の物語になっており、Garth Williams の個性的な絵とともに世界中の読者を魅了している。E.B. ホワイトは文体論 “An Approach to Style”¹ において、‘Do not overwrite.’ (58) ‘Do not explain too much.’ (61) ‘Be clear.’ (65) と戒めており、『シャーロットのおくりもの』もまた簡潔で洗練された文体で書かれていることは、衆人が認めるところである。くどくどと長い説明を押さえた文体は明快で分かりやすい。とはいえ、作品には命の救済のほかに、生、死、友情、信頼、成長、移りゆく時、個と大衆社会など様々なテーマが織り込まれ、J.R. Townsend はこの作品を ‘astonishingly full and rich’ (242)² と評し、Peter F. Neumeyer もまた、‘unquestionably a rich and a contemplative book’ (343)³ と評する。この豊かな内容をもつ作品は簡潔な文章の行間に深い意味を貯え、考え深い読者を解明と分析に駆り立て、その巢に巻き込んでいくように思われる。読者はあるいは行間を読み取れないまま作品を読み終え、あるいは行間をめぐるいくつかの解釈に異論を唱え合うことになる。小論においては、E.B. ホワイトの『シャーロットのおくりもの』を再読し、すでに発表されている批評や分析も考慮にいれながら、豚の命を救うことになった軌跡を再検討し、作品に対しひとつの解釈を加えたいと考える。

本論

『シャーロットのおくりもの』の第1章、2章は、農夫 Mr. Arable の娘 Fern が、未熟で育ちそうにないため処分されそうになった春子の豚を父親から譲り受け、Wilbur と名付けて哺乳瓶で育てる話である。8才の少女ファーンが斧を手にした父親に、‘ If I had been very small at birth, would you have killed me? ’ (3)⁴ と詰問するとき、彼の ‘ A weakling makes trouble. ’ (3) という説得は力を失う。この世に生を受けた命は人間であれ動物であれ同様に尊いという正論により、豚はすんでの所で命を救われる。ファーンは自分のものとなった小さいながら元気な子豚にまずミルクを与え、次にウィルバーと命名する。こうして、ウィルバーは一緒に生まれたほかの豚と異なり、「ペット」として、母親が子どもを育てるような世話を受けてすくすくと育つ。しかし生後5週間たったとき、アラブル氏がこれ以上飼料を提供できないと主張し、ファーンのおじ Mr. Zuckerman の農場へ移されることになる。このときファーンは両親に ‘ How much money should I ask for him? ’ (12) とウィルバーの売値を相談し、6ドルの値が付けられる。農場では豚は生計の元であり、豚の値踏みをするのは当然のことであろうが、ファーンが朝夕ミルクを飲ませ乳母車で散歩する姿を見て、ウィルバーの命が救われた幸せをともに喜んでいた読者は、この会話を聞き突然夢から覚めた思いで現実に戻される。ウィルバーは生まれた直後に粗末に殺されるところを運良く生き延びはしたが、いずれはハムやベーコンにされる運命の家畜であり、ファーンはウィルバーの一時的な延命に関ったにすぎないのである。彼女はそれを知りつつウィルバーを手放そうとしている。E.B. ホワイトの語りはさりげないが、農場の豚の厳しい現実をリアルに描き出している。

ウィルバーが移された農場の納屋では、牛や馬がいる階の下にウィルバーの居場所があり、囲いの外に羊やガチョウが暮らしている。毎日ウィルバーに会いに来るファーンに対し、ザッカーマン氏は囲いの中へ入ったり、連れ出したりすることを禁じ、囲いの外で眺めているだけなら長く居てもよいと許す。ウィルバーはもはやファーンのペットではない。両者を隔てる囲い板が、2人が別世界に生きていることを明確に示す。ウィルバー延命への解決策は、この

象徴的な囲い板の向こうの納屋という舞台でファンタジ - の形をとりながら探られることになる。少女は納屋のウィルバーやほかの動物たちを眺める傍観者であり、観客である。しかし、我が身の立場の変化を把握できていないウィルバーは他の動物たちに話しかけはするが、各々の生活に収まっている動物の仲間に入ることができない。ファーンも来ない雨の日、退屈と孤独に耐えられなくなってふさぎ込むウィルバーの前に登場するのがクモの Charlotte である。

シャーロットは、泣き疲れて闇の中で横たわるウィルバーに ‘ Do you want a friend, Wilbur? . . . I’ll be a friend to you. I’ve watched you all day and I like you. ’ (31) と声をかけ、翌朝、 ‘ Salutations! ’ (35) と奇抜な挨拶をしたあと自分の居場所を知らせる。そこで、声の主は戸口の上に巣を掛ける大きな灰色のクモであることがわかる。シャーロットは弁舌爽やかに自己紹介をし、ウィルバーの目前で巣に掛かったハエを糸でぐるぐる巻き込み、 ‘ I love blood. ’ (39) と、この血を吸って朝食にするとする。圧倒され、怯えるウィルバーにシャーロットは、罌を掛けて獲物を捕らえるクモの生き方を説明し、自活のためには仕方がないと長々説得をする。シャーロットの弁舌は、雌ガチョウが抱いていた卵から雛がかえったのをいち早く見つけたときにも發揮され、納屋の動物を代表するかのようにはガチョウの苦勞をねぎらう長い祝辞を述べる。機知に富み、深い知識を持つ理論派で、自信に満ち、話術に長けたシャーロットは一体何物か。John Griffith は彼女を ‘ the perfect friend, at once confidante, instructor, protector, and mother. ’ (115)⁵ とほめたたえ、 ‘ On one hand, she is the perfect adult. Yet she is also a fantastic character from fairyland. ’ (115) と過大に評する。シャーロットは確かに「完全な大人」に見えるが、果たして救世主の如く寂しいウィルバーを救おうとしているのか。

再び納屋の状況を考えてみれば、そこは牛や馬、羊、ガチョウ、豚などが居場所を与えられて住む所であり、クモはいわば隅を借りて住む外野的存在である。登場するまでのシャーロットの存在の薄さは、朝早く友を求めて大声で呼ぶウィルバーに対して年寄り羊が、 ‘ you are probably disturbing his rest; ’ (35) という言葉 ‘ his ’ から察しがつく。長年ここにいる羊に、ウィルバーの新しい友達が雌雄どちらか予測もできていない。おそらくシャーロットはウィルバーがやって来る以前からここに住み着いていたであろう。戸口の上から動物たちのにぎわいを眺めてはいたが、仲間に入って話しかける相手もなく、孤独

に過ごしてきたのではないか。そこで、新入りのウィルバーを1ヵ月近く観察し、心底友達を欲しがらる姿に好意を持ち、自らも友を求め、タイミングよく思い切って声を掛けたという解釈が可能である。とすれば、闇からの呼びかけや奇抜な登場の仕方も納得がいくことになる。

次に、友達を得て精神的にも安定し、体重も増えてきたウィルバーに年寄り羊がもたらした「クリスマスに豚を殺す」という不吉な情報は、ウィルバーはもちろん、シャーロットにとっても衝撃的な情報である。彼女は‘If she says they plan to kill you, I’m sure it’s true. It’s also the dirtiest trick I ever heard of. What people don’t think of!’(51)と家畜を殺す傲慢な人間に対する怒りをあらわにする。とはいえ、クリスマスの豚の屠殺については、すでに前章で雌ガチョウも知っていることが描写されている。シャーロットは物知りに見えるが、クモの生態からして、夏に子グモから成体になったばかりであり、みんなが知っている農場の慣習には疎かだったのであろう。そこで、彼女は泣きわめくウィルバーに次のように言う。

‘You shall not die,’ said Charlotte, briskly.

‘What? Really?’ cried Wilbur. ‘Who’s going to save me?’

‘I am,’ said Charlotte.

‘How?’ asked Wilbur.

‘That remains to be seen. But I am going to save you, and I want you to quiet down immediately. You’re carrying on in a childish way. Stop your crying! I can’t stand hysterics.’(51)

ウィルバーを殺させはしない、私が救うと大宣言したのである。友達になりましょうと自分から名乗り出たシャーロットは、この瞬間から、友の命を人間の手による慣習的屠殺から守るという重大な課題を抱え込んだことになる。引用部分のウィルバーとの会話で3度「救う」ことを宣言したあと、泣き続けるウィルバーをなだめるシャーロットの言葉は厳しい命令調で、いつもの甘く心地良い話し方ではない。‘hysterics’に動転しているのはシャーロットのほうでもある。以後、シャーロットは‘I was never more serious in my life. I am not going to let you die, Wilbur.’(63)と言うほど真剣に、何日もの間、時間をか

けてウィルバーの救出法を考え続ける。そして、長い黙想の後の答えは、
‘ The way to save Wilbur’s life is to play a trick on Zuckerman. If I can fool a bug, . . . I can surely fool a man ’ (67) というもので、彼女は ‘ people are very gullible. ’ (67) と断言する。前章の描写に、人は8年もかけて橋を作り、その橋を渡って向こうへ行けば何かあるかと右往左往しているというシャーロットの人間考察もあり、人間をだます具体的策略は何かと読者の期待が高まる。しかしこの話が出た日に、ファーンと兄の Avery が農場を訪れ、エイヴリーが棒でシャーロットの巣を襲う事件が起こる。ウィルバーのえさ箱の下に巣をもつ Templeton が保存していたガチョウの腐敗卵が破れ、悪臭を放ったためシャーロットは助かるが、危機一髪のところであった。納屋や倉庫に張るクモの巣は汚いというイメージが先行する。人の手で取り払われたり、時ならぬ子どもの棒の一撃を受け、命を落としかねない。ウィルバーの命を救う前にシャーロット自身の命も何の保証もない、弱者の立場であることが示唆されている。その夜、‘ thinking about the future ’ (75) と未来を考えに入れて熟考したあとシャーロットは計画を実行に移す。翌朝、夜の仕事の結果が次のように描写されている。

On foggy mornings, Charlotte’s web was truly a thing of beauty. This morning each thin strand was decorated with dozens of tiny beads of water. The web glistened in the light and made a pattern of loveliness and mystery, like a delicate veil. Even Lurvy, who wasn’t particularly interested in beauty noticed the web when he came with the pig’s breakfast. . . . There, in the center of the web, neatly woven in block letters, was a message. It said:

SOME PIG! (77)

考えてみれば、クモの巣は払いたくなる汚い巣ばかりではない。引用部分の説明のように、朝露に濡れ、朝日に輝く出来立てのクモの巣は、見事なレース編みのようでそれだけでも見とれるほど美しい。シャーロットのクモの巣は、その見事な巣の中ほどに ‘ SOME PIG ’ と文字が書きこまれ、下に立つ豚の優雅なラベルのようにになっている。かつて少女ファーンは命の尊さを直接父親に訴えてウィルバーを救った。しかしクモのシャーロットに直接的手段はなく、

間接的手段を用いるほかない。クモが餌を取る巣に文字を書いて人間をだますとは、ホワイトの何というユニークな発想かと思わずにいられない。シャーロットの策略は著しい効果を発揮し、雇い人の Lurvy はお祈りまで唱えて、ザッカーマン氏を呼ぶ。夫人も呼び出され、少しクモを疑いはするが、3人の視線は書かれた文字と豚へ向けられる。ザッカーマン氏はウィルバーを ‘a very unusual pig.’ (79) と考え、前から ‘an extra good one’ (81) だと思っていたなどと言ひだし、牧師館へ「奇跡」が起こったと伝える。うわさが広まり、農場には ‘a wondrous pig’ (83), ‘the miraculous animal’ (84) を一目みようとする見物人があふれる。人々は突然現われた ‘some pig’ というほめ言葉をお告げのように受け取り、豚を「奇跡的な特別な豚」であると考えたのである。ウィルバー自身に何の変化があったわけでもない。説明のつかない不思議な現象に弱い、物見高い人々の反応はシャーロットの思惑通りである。

クモの巣の文字出現は、周囲の人々のウィルバーへの見方を変えただけではない。ファーンはシャーロットの策略が成功していることを喜びはするが、いつも大勢の人が押しかける納屋を以前ほど快適な場所とは感じなくなる。独占していた観客席を大人に占領され、好奇心が徐々に別の方へ移っていくのは子どもとして自然なことである。納屋の中では、シャーロットは他の動物に計略の成功を伝え、次に巣に書く文字について意見を聞く。動物たちは ‘Hurray!’ (87) と喜びの声を上げ、意見を出し合い、‘terrific’ (88) が決まる。さらに次の文字のためには、年寄り羊に説得をされた自己中心的なテンブルトンが3度も宣伝広告の切れはしを運んでくる。シャーロットはウィルバーをよく見て吟味した末に ‘radiant’ (101) を決める。ウィルバーの命の救出作戦はシャーロットひとりの戦いではなく、彼女を中心にした納屋の動物たちの自然発生的なチムワークの様相を呈し、納屋には以前にはなかった親近感と連帯感が漂っている。当のウィルバーは ‘terrific’ に対し ‘I’m *not* terrific.’ (89) (91) と繰り返し違和感を訴えるが、シャーロットに ‘People believe almost anything they see in print.’ (89) や、‘You’re my best friend, and I think you’re sensational.’ (91) となだめられ、翌日クモの巣の下に立ったときには、不思議にも、‘really *felt* terrific,’ (96) とその気分になってしまっている。3番目の ‘radiant’ 決定の際には、シャーロットの指示で飛んだり跳ねたり、アクロバットのように動き回ったあと、‘I *feel* radiant.’ (101) と自らを言葉に合

わせることができるほど著しい成長をみせる。

Ashraf H.A. Rushdy はこのような納屋の動きを ‘ the advertising agency ’ だと指摘し、さらに ‘ the barn containing some pragmatic behaviorist animals ’ (48)⁶と続けている。しかし、ここに宣伝文句と宣伝対象、そして宣伝市場の不思議な相互作用の原理がある。例えば、ほとんどのアイドルが売出し当初はごく普通の少年少女であっても、波に乗り、人々の注目を集めるに従いさらにレベルアップした言葉で飾られたとしてもなんら違和感は感じられなくなる。シャーロットはスローガンとアイドルの関係を見極めているかのように ‘ Well, you are a good little pig, and radiant you shall be. I’m in this thing pretty deep now – I might as well go the limit. ’ (101) とウィルバーを導き、やれるだけやる覚悟を口にしている。他方、Lucy Rollin はこうしてウィルバーを導くシャーロットを ‘ She accomplishes her mothering solely through language. ’ (44)⁷と言葉をとおして子どもを育てる母親役であると述べ、恐怖知らずの男らしさも合わせ持ち、ステレオタイプの女性像を脱していると分析しているが、前述のように、シャーロットはウィルバーの友達として、ザッカマン氏にウィルバーの屠殺を思い留まらせるため瀬戸際に立ってあらゆる方策を駆使している。その姿は、母親役というよりウィルバーを売り出すプロデューサーのようである。

納屋のウィルバーの宣伝文句が ‘ terrific ’ になったとき、ザッカマン氏は妻に新聞社へ電話で知らせるように指示し、9月6日の品評会にウィルバーを出すと決定。運搬用の木枠に ‘ Zuckerman’s Famous Pig ’ (96) と書かせる。彼には有名な豚が彼の所有であることが大事なことである。ウィルバーは特別扱いで飼育され、 ‘ Wilbur was a pig any man would be proud of. ’ (114) と描かれるほど立派になり、人気も上昇していく。品評会で賞でも獲得できれば、ザッカマン氏はウィルバーを殺すことを断念するだろう。シャーロットは、これで策略はほぼ成功したと考え、自分の産卵のほうへ気持ちを移すが、念のためテンブルトンを連れて品評会に同行すると決める。しかし、品評会に出発する朝、アラブル氏が ‘ You’ll get some extra good ham and bacon, Homer, when it comes time to kill *that* pig. ’ (126) と言ってウィルバーを失神させる。「人をだます」とは大きな賭けのようなものである。シャーロットは巢に書く文字を ‘ Pig Supreme ’ (87) や ‘ Crunchy ’ (98) など食べ物を連想させる言葉を除き

慎重に選んできたが、‘ some pig ’, ‘ terrific ’, ‘ radiant ’ はいずれも家畜として豚の品質の高さを示す言葉でもある。ウィルバーは今やその言葉通り素晴らしい豚で、バタ - ミルクで磨かれ、すべすべした輝く肌になっている。品評会に出す「家畜」として魅力的な豚になっているということである。これではシャーロットの策略は完成したとはいえない。このとき豚を運ぶ木枠の中に隠れていたシャーロットの描写はないが、彼女はアラブル氏の発言に肝を冷やし、今から品評会場へ行ってやるべきことを知ったはずである。

品評会場でウィルバーの囲いに移動したシャーロットは、テンブルトンに文字を持ち帰るよう頼み、テンブルトンは見つけた新聞紙から ‘ HUMBLE ’ の一字をちぎり取って持ち帰る。‘ humble ’ をその意味から考えれば、言葉の発見者テンブルトンこそこの言葉に合っていると言わねばならない。テンブルトンは農場のがらくたを集め、豚の残飯で生きている。品評会に随行してきたのも食べ残しの御馳走が目当てであった。一方、ウィルバーにふさわしい類した言葉を考えるなら、有名になったウィルバーを描写する文章 ‘ Wilbur was modest; fame did not spoil him. ’ (115) に使われている ‘ modest ’ がある。しかしシャーロットは ‘ humble ’ を ‘ It means not proud and it means near the ground. That’s Wilbur all over. ’ (140) と気に入り、最後の言葉として巣に書きつける。傲慢な人間をだますには、反語的な ‘ humble ’ がかえって無難で効果的だと判断したということであろうか。シャーロットはこの度は、前3つの言葉とはかなり異なった言葉を選択している。翌日、‘ humble ’ と書いたクモの巣の前のウィルバーと人々の様子が次のように描かれている。

‘ HUMBLE, ’ said Mr. Zuckerman. ‘ Now isn’t that just the word for Wilbur! ’

Everyone rejoiced to find that the miracle of the web had been repeated. Wilbur gazed up lovingly into their faces. He looked very humble and very grateful

Everybody who visited the pigpen had a good word to say about Wilbur. Everyone admired the web. And of course nobody noticed Charlotte. (149 – 151)

‘humble’ をザッカーマン氏はウィルバーにぴったりの言葉だと言い、みんなはまたクモの巣の奇跡が起こったことを喜ぶ。ウィルバーは言葉にふさわしい様子で立ち、訪れた人々はウィルバーをほめ、感心してクモの巣を眺めている。しかしながら、立派な、有名な豚の所有者であることを誇るザッカーマン氏が、‘humble’ に感心するのはなぜか。彼は新たな奇跡が現われれば、何でもあれ、受けるべき言葉として拝受しているように思われる。この4番目の言葉‘humble’ について、Janice M. Alberghene は、シャーロットの言葉選びとウィルバーの呼応した態度を評価したあと、シャーロットが自分の名声を求めずウィルバーに称賛が集まるようにするため努力している点に注目し、‘“Humble” aptly characterizes this goal.’ (38)⁸ と評し、ギリシャ神話の中のクモに変えられた高慢な機織り Arachne を考え合わせ、‘“Humble” is Charlotte’s reversal of Arachne’s hubris. She does play a trick on her gullible Olympians, the Zuckermans et al., but she plays the trick out of love, not pride.’ (39) と、ザッカーマン氏をだまそうとするシャーロットと関連づけた解釈に留まっている。しかし、前出の Peter F. Neumeyer は、‘humble’ を A.A. Milne の *Winnie-the-Pooh* (1926) における ‘North Pole’ や ‘Trespassers’ の場合といくぶん似ていると指摘し、‘The word is simply askew for the occasion, a good joke.’ (Neumeyer 346) と E. B. ホワイトの ‘askew’ な言葉使いを評価する。そして、‘The magic word is itself common and unpretentious, simple, yet misunderstood, and it turns out, . . . to be the “open sesame” that clinches Wilbur’s salvation and sinecure’ (Neumeyer 346) と説明を続け、‘humble’ をウィルバーの救済を確定する「開けごま」となる魔法の言葉であると位置づける。

さて、品評会場では隣の大きな豚が一等をとり、関係者は一旦落胆するが、人々を引きつける新たな文字 ‘humble’ が功を奏したかのように突然、ウィルバーに特別賞を授与するという発表がある。表彰式の長いアナウンスの内容をまとめると、まず、ザッカーマン氏の ‘distinguished pig’ が ‘attracting many valuable tourists to our great State.’ (157) と、その名声によってこの州へ多くの貴重な観光客を招いた功績を称える。そして、この夏ザッカーマン氏の納屋のクモの巣に不思議にも現われた文字によりこの豚は ‘completely out of the ordinary’ (157) であり、その奇跡は分析できていないが、‘we should

all feel proud and grateful. ' (157) と強調し、クモの巣に書かれた最初の3つの言葉ががいかに豚に合っているかを説明する。最後にザッカーマン氏に賞金25ドルと豚に青銅のメダルを進呈するという言葉に ' this radiant, this terrific, this humble pig ' (158) と4番目の言葉 ' humble ' も添えている。特別な豚の所有者として観衆の前で歓声と拍手を浴びて賞を受け、ザッカーマン氏にとって、この日は生涯最良の日となる。Norton D. Kinghorn がこの表彰部分を取り上げ、 ' Pride and profit . . . now prove them vulnerable to the stratagems of a selfless, heroic spider who can write. ' (8)⁹ と述べるとおり、結局ザッカーマン氏はこの栄誉ある特別賞の受賞に満足し、ウィルバーのメダルを納屋の豚囲いの上の釘に掛け、見物客によく見えるようにする。ついに、ウィルバーは屠殺用の家畜ではない「特別な豚」として生ある限り生かされることが確かになった。

しかし、この受賞において4番目の言葉 ' humble ' の効果はどこにあったのか。Janice M. Alberghene と Peter F. Neumeyer がともに「ゴ - ル」や「開けごま」となる魔法の言葉であると分析していたにもかかわらず、表彰のアナウンスにはほんの一度出てきただけである。 ' humble ' はこの表彰を促進する要因にはなったかもしれないが、これが無かったとしても表彰はされたとさえ考えられる。ここで再び ' humble ' について考察すると、はじめの3つの言葉と異なる重要な点は、 ' humble ' は ' modest ' ほどの誉め言葉ではないが、これとて性格を表わす形容詞であるということである。4番目の文字にウィルバーの性格を示す言葉を書けば、だれも彼をハムやベ - コンにするため畜殺することなどできなくなる。最後に書く言葉として申し分ない選択だとシャーロットは考えたのではないか。つまり、 ' humble ' は、ウィルバーの救済を確かにするため、品評会での受賞を目指す以外のもうひとつの周到な罠になっているのである。 ' humble ' と書くことと決まったあとテンブルトンは、 ' Bye, bye, my humble Wilbur! Fare thee well, Charlotte, you old schemer! ' (140) と言って夜の外出をする。テンブルトンは彼女の最後の言葉に託した策略を見抜いているような言い草である。そして、明らかに ' humble ' の罠に掛かったザッカーマン氏は、表彰式で気を失って倒れたウィルバーを ' He's modest and can't stand praise. ' (159) と、とっさに ' humble ' を ' modest ' に置き換えて弁護している。シャーロットの企みがザッカーマン氏に対して有効に働いている証

である。シャーロットが自身の死を目前に必死で試みた最後のウィルバー救出作戦は完全なものである。その意味で、‘humble’は、Neumeyer が同類として例にあげた *Winnie-the-Pooh* の場合と比較できない、読者を唸らせ、ほくそ笑ませる巧妙な語法であると言えよう。

おわりに

本論において論じたように、『シャーロットのおくりもの』における豚の命の救済は、まず少女ファーンが粗末に扱われた豚の命を救い、ウィルバーと名付けて一時的にペットとして育て、本来の家畜として納屋に移す。この豚と友達になったクモが仲間の協力を得て、クモの巣に言葉を書くという策略で人々の注目を集め、最終的には人間に2重の罠を仕掛け、豚を「特別な豚」として生かすことに成功するという構図になっていることが明かとなった。話の筋からみて、最初の2章のあと観客と化すファーンの役割は陰が薄いとも思われ、最初の2章を子どもの読者が複雑な3章以降を理解するための ‘a cognitive map’ (125)¹⁰ であるとみる Perry Nodelman の明解な分析もある。しかし、シャーロットをウィルバーの命の救済に駆り立てたものは、家畜として納屋へ移されたことを自覚せず、友を求め、「死にたくない」と叫ぶ、ウィルバー自身の生きることへの強い願望にほかならない。とすれば、最初の2章はファーンがウィルバーをペットとして育て、生きる喜びを教える役割を担っている点にこそ注目すべきである。生の尊厳や喜びが物語の起の部分で強調されているがゆえに、シャーロットが最後まで手を弛めずウィルバーを救出しようとする展開部分が一層説得力を持つことになるのである。こうして作品は、構造および言語表現のいずれからみても、幾重にも重なった精巧なクモの巣にきらめく朝露が掛かったような仕上がりになっており、別の糸を手繰り寄せればまた新たな解釈を生むことが可能であると思われる。

註

1. Strunk, Jr., William and E.B. White. *The Elements of Style*. New York: Macmillan Company, 1959. 52-71.

2. Townsend, J.R. *Written for Children*. Kestrel Books, 1974.
3. Neumeyer, Peter F. "E.B. White." *American Writers for children, 1900-1960*. Ed. John Cech. Detroit: Gale Research Company, 1983. 333-350.
4. White, E.B. *Charlotte's Web*. New York: Harper & Row, 1952. 以下本文からの本書からの引用には、ページ数のみを記す。
5. Griffith, John. "Charlotte's Web: *A lonely Fantasy of love*." *Children's Literature* 8(1980): 111-117.
6. Rushdy, Ashraf H.A. "'The Miracle of the Web': Community, Desire, and Narrativity in *Charlotte's Web*." *The Lion and The Unicorn* 15(1991): 35-60.
7. Rollin, Lucy. "*The Reproduction of Mothering in Charlott's Web*." *Children's Literature* 18(1990): 42-52.
8. Alberghene, Janice M. "Writing in *Charlotte's Web*." *Children's Literature in Education* 16(1985): 32-44.
9. Kinghorn, Norton D. "The Real Miracle of *Charlotte's Web*." *Children's Literature Association Quarterly* 11(1986): 4-9.
10. Nodelman, Perry. "*Text as Teacher: The Beginning of Charlotte's Web*." *Children's Literature* 13(1985): 109-127.